

ことばの活動のリアリティとは——あべようこ

この夏から社会人の日本語クラスを担当することになった。クラスといっても、日本企業の研究職に就いている研究員と、育児をしながら通訳ボランティアをしている2人が集まる教室である。自分のテーマを決め、考えを伝え合いながら、作文を完成するという活動に関心を示してくれた学習者である。しかし、クラスをとった理由は、日本人のようにミスなく日本語が話せるようになりたいというのが、率直なところのようだった。そこで、提案したのは、一人で自分の作文に取り組むのではなく、互いにコメントし合いながら、興味のあるテーマで作文を書き、その中で文法を考えていこうというものだった。2人は一応それを納得し、クラスを開始することにした。

2人はそれぞれがテーマを選び、私はそれぞれの考えの筋道が伝わるように働きかけ、お互いの考え方が最終的に共有できる関係を作っていきたいと考えていた。やがて、「研究員」は「ボランティア」の作文に対して、問いがたくさんあるけど、答えがないと指摘し、「ボランティア」は論文やレポートのように書くつもりはない、自分をふり返るために書いていると主張する。「ボランティア」は挫折を経験したことがないと私の考えはわからないと言い、「研究員」は挫折は経験していないが、文章として理解していると反論する。こんなやりとりが増えた。やはり、作文を良くするための協力はできても、それぞれの考えを共有することは無理なのかと思った。

しかし、2人の間に「つながるか」「線になるか」ということばが頻繁に交わされるようになる。はじめに述べたことと次の主張に矛盾がないか、筋が通っていないんじゃないかということを互いにコメントし合っている。「線になってる?」「つながらないんじゃない?」「言っているつもりだけど、まだ言っていない?」などがお互いの作文を読みあうときに生まれるお決まりフレーズとなる。そして、このフレーズが出るたびに、お互いに

「ちくっ」と指されたり、指したりして笑いが起こる。それは同時に、自分の作品を「ちくっ」と読み返す目にもなっているようだ。書いたことがタイトルと「つながるか」と考え込んでいる。伝えるためには考えの筋道を示しあうことが大切だということが教室の共通の認識となり、活動を動かかしはじめている。

このクラスは「研究」や「育児」の諸事情でまだ進行中である。はたして、目論見どおりに互いの考えやものの見方を共有することができるかわからない。しかし、教室は、互いがそれぞれの時間の中で重ねてきた考え、ものの見方を持って、それぞれの異なる環境で生きてきた2人、いや3人が互いの考えを表現する場である。異なる考え方、ものの見方、価値を持った一人一人が出会い、考えを交差させ、それぞれの異なりのゆえに伝わらないものをどのように伝えるようにしていくかということが活動の中心になってきた。そこには数値化されたコミュニケーション能力の向上をめざすことも、設定されたコミュニケーション活動に追い込むこともない、本来のことばの活動のリアリティがあるのではないかと考える。

私自身にとって教室という場が、自らが実現したいという教室理念と実践が線になっているのか、つながっているのかと常に問い直しながら、「ちく」と自らをふりかえり、言語化しなければならない秋がもう来ている。

ヒントの発見——市嶋典子

私は今、シリアのダマスカスにいる。ダマスカスは3年間過ごした街であり、私にとっての第二の故郷であると言える。昔の勤務先を訪ねたり、旧友に会いにいたりしているうちにあっという間に時が過ぎていく。滞在期間は残すところあと2週間しかない。

昔の勤務先では相変わらず問題が絶えない。いつのまにか私もその問題の渦に巻き込まれ、気が付くと一緒になって問題解決に向けて試行錯誤している。この試行錯誤はつらいながらも、私の思考をかなり活性化させてくれる。

問題の根本を探っていくと、実は取るに足らないことであることが多い。そのほとんどが、コミュニケーション不足が問題の原因であることが多い。面倒なことを避けようと適当なコミュニケーションで済ませようとしたり、伝達を他人任せにしたりすると、徐々に、相互の考えに食い違いが生まれる。食い違いが生まれたことにも気付かないまま時がたつと、問題が雪だるま式に大きくなっていて、気付いたときにはすでに手遅れになっている。それを避けるためにも、常に自分の考えを伝え、相手の考えを把握しようとする姿勢が必要になるのだろう。

今回、問題解決に向けて、複数の関係者とたくさん話を話した。皆それぞれ自己主張が強く、自説を曲げない。これには頭を悩ませた。自説が正しいと信じ込み、感情的に主張する。また、他者の意見に耳を傾ける余裕もない。正直、その場から逃げ出したい気持ちで一杯だった。

しかし、話し合いを重ねていくうちにあることに気が付いた。それは自分の研究テーマである「協働」が話し合いの重要なコンセプトになるのではないかということである。お互いの主張に接点がないまま話し合いを続けても、平行線をたどるだけで、いつまでたっても折り合いがつかない。折り合いをつけるためにも、相互に接点を見出し、問題を共有することが必要になる。問題が共有されてはじめて、一人一人の固有の考えや主張を明確に提示しあうことができるようになるのではないだろうか。

細かい経緯は省略するが、話し合いの中で、「主体性」と「対等性」という概念を話し合いの接点として提示してみた。すると話し合いに少しずつ共有性が生まれ、一方的な主張から、複合的な話し合いへと発展し、

「協働的相互作用」が見られるようになってきた。そして、仮にはあるが、関係者の中に合意が生まれ、問題の解決策を見出すことができた。

今回の経験により、「協働」は、日本語教育に限らず、あらゆる場面において重要であり普遍的な概念であると実感した。また、研究テーマに関係するヒントは、理論や実践からだけではなく、日々の生活の中にも潜んでいるものであるな、としみじみと感じた。だからこそ、常にアンテナを張り、考えることを習慣付ける必要があるのだろう。それが私の生き方のヒントにつながるかもしれないからだ。

教育観と学習観の間のわたし——牛窪隆太

先学期は、かなりの頻度で授業の夢を見る学期だった。噂の「毎日総合」（正式名：日本語4β）授業を担当したからだ。指定の教科書もテストもなく、学生の書いたレポートに徹底的に即して進むこの授業活動では、授業方針や方法について、学生と議論になることも多かった。

授業活動では、学生の書いたレポートについて、何を言いたかったのか問い、どのように書けばそれがわかるようになるのかを皆で話し合うのだが、学生は、やはり最後はレポートの「変な表現」を先生が直すべきだという。今まで、日本語の授業と言えば先生が教えるものと思っていた学生にとって、最後に教師が直さないという授業は、（ガイダンスで説明されたものであったとしても）こちらの予想以上に意外であったようだ。話し合いの中で、こちらからも意味不明の部分を問い、共に表現を考えることで、レポートがよくなっているとしても、学生としては、自分のレポートには間違いがないという安心感を得たいのだろう。

ここでわたしはある岐路に立たされることになった。教師の教育観と学生の学習観の不一致の問題である。この場合の学生のニーズは、教師が

レポートの「変な部分」を訂正し、正しいものにするべきであるという要求であろう。しかし、学生のニーズに沿って最終的なレポートを教師の裁量で訂正するのであれば、この活動の意味はなくなってしまう。つまり、授業の中で話し合い、皆で表現を考える作業の意味そのものが、最終的な教師一個人の決定の前に崩れ落ちてしまうのだ。学生との議論では、それぞれ自分の考えを話してもらい、どのような意図でこの活動を行なっているのかということ、自分の日本語に自信と責任を持ってほしいというこちらの考えを根気強く伝えるようにした。時には、90分の授業時間のうち、1時間近くを議論に費やした。途中で面倒になって、すべて学生の言うとおりにしようかと投げやりな気持ちにもなったが、言語教育を専門とするものとしての信念もあり、それを簡単にすべて放棄する気にもなれなかった。ある学生は、授業後に、日本語の問題から議論の中では自分が言いたいことが伝わらなかったかもしれないからと、1時間かけて書いたという自分の意見を携帯電話から送ってきた。少なくとも学生たちは、この授業活動に自分の意思でかかわろうとしているようだった。

それから3ヶ月たって最終的に提出された学生たちのレポートの「おわりに」には、授業での話し合いを通して、日本語だけではなく、担当者や他の学生との人間関係を学んだというコメントが多く見られた。また、この授業で学んだ一番大切なことは自分の日本語に自信があることと書いた学生もいた。

教師の意図のすべてを理解・納得して、学生が授業活動を終えたとは思えないが、話し合い、共に授業を作っていく過程で、学生たちは何かを得たと考えてよいだろう。そしておそらく、次に彼らが日本語の授業を受ける際のニーズや学習観は、もはや3ヶ月前と同じものではない。

『生活のリズム』——大西博子

大学院にはいって4ヶ月はあつという間だった。大学にはいってからの4年間もあつという間だったが、その4年間の「あつという間さ」とは大きく違っていた。

それは一週間のリズムが、水曜の実践を中心として、それをめぐる協働的な評価・検証というサイクルによって心地よく（ときには苦しきだけど）刻まれていたことである。わたしにとって、何かに関心をもって、その関心を軸に生活のリズムがきざまれるということほど、嬉しいことはない。ぐうたら好きなときに好きなことをしていた学部時代の一頃をおもいだすと、なんて幸せなことだろうかと思う。

また、もうひとつは「協働」することのできる関係をもてたということも一つの大きな意義であった。さまざまな問題に複眼的な光をあてて、解決をしていく、あるいはみんなのアドバイスがあつまってより豊かなアイデアにかわっていく、そんな協働的な実践活動を経験することをおして、「みんなですること」（人にたよらず自律的に）の大切さを当たり前ではあるがひしひしと感じている。

と、同時に、この充実した心地よいリズムをこれからもずっと持続させていくためにはどうすればいいだろうか。やはり一番必要なのは、美味しい食事や音楽や、寝ることという自分にとって不可欠な時間をも削らずに、なおかつ実践研究そのものを、常に面白くしていくことではないことではないかと思う。一期目は少し、それらの大切な要素を削ったり、苦痛に思ったり、少し自分に無理をしてしまったように思う。だから思いっきり……老けてしまった（ショック）。

先輩のくれたクッキーのレシピを眺めつつ、これから、休日にはゆくり自分の時間をもちつつ、自分にとってのオアシスを大切にしながら、このリズムを持続させてがんばっていきたくと思った。

実践をめぐる協働的評価・検証。そしてよく寝て、おいしいものを食べる。これが2期目からのわたしの生活リズムの大切なキーワードになるだろう。

学ぶことって楽しい…はず——小田晶子

日本語教育について考える、という、同じ目的を持った仲間と、共に切磋琢磨しながら学べる大学院は、私にとってひとつの夢であった。その夢が叶い、4月から言語文化教育研究室に入り、1期が過ぎた。学ぶことの幸せを満喫する…はずであった。しかしながら、この1期目を振り返ると、楽しいはずの学びを、私は十分に楽しんでいなかったような気がする。楽しむ余裕がなかったと言ったほうがいいだろうか。

最初は、時間的余裕がないような気がしていた。常に何かやることに追われ、そのひとつひとつへの関り方が、中途半端で、満足がいかなかった。しかし、実は、それは時間の問題なのではなく、何よりわたしの心に余裕がなかったのだと、後になって気がついた。心に余裕がないと、頭も体も固くなり、視野が狭まり、自分のことが評価できなくなる。自分のことを評価する、つまり自分の感情に呑み込まれることなく、自分をポンと突き放して、うまくいかないと感じることを、うまくいくように「考えること」、すなわち、自己を相対化することが、学びを生み出し、学びを楽しむための秘訣なのではないだろうか、凍りついた頭と体がじわじわと溶けて、考えることができるようになったのは、この夏休みのことである。

あるとき、子供が、時間をかけて、慎重に、慎重に、高く積み上げた積み木が崩れるのを見て、一瞬の沈黙の後、けたけたと笑いだしたのを見た。私は、子供が自分の「失敗」に泣き出すか、怒り出すかすると思ったので、その笑いは意外だった。ものの見方、認識の仕方によって、「こと」

は色を変えろということ、あらためて実感した瞬間であった。その「こと」を「失敗」ととらえ、泣いて落ち込むか、「面白い!」と、とらえるかによって、同じ「こと」は全くちがう意味をもつ。

「笑い」というのは、余裕の産物なのではないだろうか。あるいは、笑ってみることで、余裕ができ、それまで気づかなかった物事の新しい側面がみえてくるのかもしれない。自分を突き放し、自分というものを一段高いところから見下ろして、笑い飛ばすくらいの余裕をもって、研究に臨めたら…と思うのだが、これは、なかなか難しそうである…

私の日本語教育は何を目指しているのか——キム ヨンナム

大学院に入って、1年が経った。入学当初は、大学を卒業してから久しぶりに始める勉強や大学院生活という未知の世界に対する期待と夢で胸がいっぱいであったと覚えている。しかし、2年の修士課程の半分を終えた今の私の気持ちはどうか。あと1年できちんと論文が書けるのか、悔いのないように残った時間を充実で過ごすことができるのか、卒業した後はどうするのか、と不安と苛立ちと、たまには絶望感の中で新学期を迎えようとしている。

大学院で研究（私にはまだ「勉強」という用語が適切かも知れない）していると、実際の教育現場からかけ離れた「理想」の日本語教育というものに陥りやすいと、誰かに聞いたことがあるが、まさに今の私はその理想の教育という沼の中に両足を入れ込んだまま徐々に沈んでいたなど、最近思うようになった。

私がこのように思うようになったのは、今回の夏休みに国の母校で後輩を対象に「総合」を行ってからだ。第二言語として日本語を勉強している学習者があえて日本に留学しなくても、自分の国で十分日本語を習得す

ることができる、という考え方は、大学院入学当時は希望であって、在学しながらは確固とした信念に転じていたようだ。母校で私が開いた日本語教室で、「総合」のような教室で日本語を学習して日本語が上手になっても、それにしても卒業したらぜひ日本に留学したい」という後輩たちを見ながら、私は何を目標として大学院にいるのかと、改めて考えるようになった。

日本語が通用されているところに行くと、いわゆる日本人と名指される人々と付き合わない限り「自然な日本語」はできないという考え方は、恐ろしいほど強く学習者の認識の中に根付いているようだった。このような人たちに、「自然な日本語」ってないよ、「あなたが考えていることを表現した日本語こそ自然よ」といくら言ったって、「先生、この日本語、おかしくありませんか」と聞いてくる始末だった。

私は今、日本語教育の中で何を目標し、勉強を続けているのか。今回、母校で自分の手で後輩達の日本語学習を手伝いながら、そのことに気づき、何だかよく分からないが目に見えない壁のようなものにおつかったような気分になった。

大学院を卒業した後、何をどうするのかはまだはっきり決めていないが、おそらく日本語を人に教える「先生」という職に就くことになるだろうと思う。私の場合は、できれば将来は国へ帰り、日本語を学ぼうとする人たちを手伝いたいという気持ちが強い。しかし、国での日本語クラスというものが、いつか日本のある街で日本人とやり取りするために予め「訓練」する場になってはいけないと思っている。言語は自分を表現する手段の一つであり、第二言語の習得というものは自分を表現する方法をもう一つ増やすことであると思っているからだ。

もしかしたら自分の中にある理想と外の世界の現実とのギャップを縮めるのが、私が日本語教育で目指すべきものであるかも知れない。

ラジオからの声に想う——古賀和恵

最近、よくNHKのAM放送を聞く。以前はFMの音楽番組を聞くことが多かったが、いつの間にか見知らぬ人々が寄せるさまざまな声に耳を傾けるようになった。季節の便り、日々の生活のなかで出会った出来事、家庭菜園で収穫した野菜の料理方法についてのお尋ねとそれへの答え。時に心に受けた痛手や悩み、迷いを語る人がいれば多くの励ましや共感の声が寄せられる。今年には戦後60年ということで特集が生まれ、多くの方々が戦争にまつわる辛く悲しい体験を綴ることを通して平和への思いを静かに語りかけていた。私はラジオから流れてくるそうしたさまざまな声を聞きながら、見知らぬ人の身の回りで起こる出来事に笑い、暖かい気持ちにさせられ、遠い日に無残に散った人々の無念を想像する。むかし、静かに座しているときに、人間ほど声を発する動物はいないのではないかと聞いた人がいたが、耳だけをたよりに交差する声と思いをたどっていくときに、人とはこうもだれかに向かって語りかけ、人の語りかけに耳を傾げるものかと改めて気づく。そして、ことばによって人と人同士がつながっていくふしぎを想う。

そんなラジオとの暮らしのせいもあってか、最近しきりに心に浮かぶことばは「ともに生きる」である。このことばのあたまには「多文化」もなにもつかない。また、それは「ともに生きる」を難しくするものはなんなのだろうかという問いをも含む。それはまた「みんな仲良く」とも違う。「仲良く」なくとも「ともに生きる」はできるであろう。私とて苦手な人はいる。「仲良く」から「ともに生きない」のぎりぎり手前までのさまざまな幅のなかで「ともに生きる」ときに、ことばのはたす役割がいかに大きいかをラジオを聞きながらしみじみ感じる。もちろん、ことばがすべてとは思わない。ことばを交わしさえすればわかり合えると信じられるほど、しあわせな経験ばかりしてきたわけではない。しかし、ことばを交わさなけ

ればわからないこと、ことばを交わすからこそわかることがある。ことばを交わすことで人と人とがつながっていきるとき、すでに「ともに生きる」が始まっている。これは、これまでのしあわせな経験からの実感でもある。

これまで別々の道を歩き、これからもそれぞれの道を歩いていく人たちがほんの一瞬交差する場であることばの教室。私はそこを、どのようなことばをどのように交わすことが「ともに生きる」へとつながっていくのか、「ともに生きる」とはどういうことかを学ぶ場としたい。そしてさらに、そこでの経験が一人ひとりがその先であう人々と「ともに生きる」を実現していくときの支えになっていけばと思う。

ラジオはさまざまな人々の声とともに、「ともに生きる」が難しい状況があちらにもこちらにもあることを日々告げている。ことばの教室は、そうした難しい状況を超えていくにはどうすればよいかを、私もふくめそこに集まる一人ひとりが見いだしていく場となりうるのではないか。朝のひととき、あるいは眠りにつく前の深夜、見知らぬ人々の声に耳を傾けながら、最近しきりにそんなことを考えている。

更なる重大なステージへの挑戦——アンドラハーノフ・アレクサンダー

いよいよ私の研究人生にもう一つ大きなページがめくられた。それは更なる重大なステージへの挑戦を意味する博士課程への入学である。

これまでの収穫は、私の研究テーマである日本語教育とメディア・リテラシーの関係において核をなす理論構築がひとつおりの形となったことだ。それをどのように実践、検証していくかを考えることは今後の課題だ。壮大な計画は存在するが、まずは「言語教育におけるメディア・リテラシー」という分野の輪郭をつくっていく。

具体的な手順として、将来のシナリオを構想し、先行する研究での言語教育におけるメディア・リテラシーの意義に関する考察の成果から研究を開始しようと思う。前例は決して多くないが、これまでの研究・経験を参考にすれば、今後の方向性が探れると考える。

これまでの成果としては、メディア・リテラシー論と「文化リテラシー」が出発点となり、私なりの試論が完成したが、「教室設計」、「協働」、「評価」といった「言語教育学」の観点を結びつける新しい視点を検討する必要があるようだ。

これまでの経過およびビジョンも常に2つの分野の課題を結びつけて考えていくことが私の宿命に（または私の方法論と）なってしまったようだ。さらに、目指すべき目標を達成するための方法論の開発のための長い検証過程を覚悟しなければならない。

幸い友人にも恵まれ、私の日本語教育観を受け入れてくれる場所があり、理論を検証する機会も与えられている。また、これまでの研究成果を修士論文の形でまとめ、さらに早稲田大学の日本語教育学会において自己確認をすることができた。発表は理論だけのものだったが、今後それを事例で検証する必要性を大いに感じた。

一見、関係がなさそうに見えるが、メディア・リテラシーと言語教育の研究はお互い生かされあうものだと考える。社会学のマスメディア論を起源とするメディア・リテラシーと言語教育学の研究を確認すれば、その接点が自ずと出てくるように思う。そして、その接点を整理し、2つのものが融合するための環境を整備することが私の今後の研究の課題、これからの仕事である。

また新しい分野を開拓していくことの困難さとそれに伴う達成感があり、今後も友人を増やししながら、常に自己検証を心掛け、余裕を持って、研究に励もうと思う。

粘り強く…実践そして研究——武 一美

ほとんど毎日研究室に入り浸っているので、近況というのも恥ずかしい。春期に引き続き、秋期も別科の3βクラス（通称「毎日総合」）を担当している。

最近私の中でヒットしているキーワードは、「チーム・ティーチング」と「共同研究」だ。2004年から行なわれていた3β・4βの合同授業を、2005年春期からは活動の核としてスケジュールに組み込んだ。クラス内でお互いに「わかったつもり」になったところに「活を入れる」というのが主な目的だ。

この合同授業を行なうためには、3βと4βが足並みを揃えて活動を行なわなければならない。両クラスの担当者4人は、頻繁に打ち合わせをする必要が生じ、打ち合わせのたびに、その週の到達目標と現状を話し合い、スケジュール調整を重ねた。そして毎日の授業報告は、活動の内容がしっかりと伝わるものに次第になっていった。私自身は授業報告を書きながら、もう一度自分の授業を振り返り、学生の状況を分析することができ、他の担当者の授業報告に学ぶことがたくさんあった。

3β・4βの授業報告は、4人共かなりの時間を割いて書いていた。効率は悪いが、この授業報告があったから、4人の担当者が3β・4β両クラスの学生たちのレポートの進捗状況（その過程も含めて）を知ることができ、そのレポートを楽しみにそして大切に思い、合同授業もうまく進行できた。

この4人のチームワークがそのまま共同研究へとつながった。実践を共有した担当者が意見を出し合い、実践を研究し、それをまた実践へ戻していくという豊かな場と仲間を得られたことに感謝している。（共同研究は進行中）

春期のチームは、4期生の牛窪さん、橋本さん、2期生の田中奈央さん（待遇コミュニケーション研究室）だったが、秋期は田中奈央さんに代わってフランス帰りの4期生星野さんが新メンバーとなる。また1歩、3β・4βクラスの実践が進むことを願い、秋期も粘り強く、学生とそして担当者間で話し合いを重ねていきたい。

韓国で出会った「オパ」「オンニ」「アジョシ」——姫

ワークショップで釜山へ行く前から私はいろいろと心配をしていた。まず、釜山は12年ぶり、光州は初めてでよくわからない町であること。また、タイミングよく体の調子が悪く5日間入院をしていたので、誰かと話をすることすらつらいほど体力がないこと。しかし、一番は初対面の人とはあまり話さない自分のことが心配だった。私は「人とすぐ仲良くなれる！」と周りの人によく思われる。が、実際には、何かを食べに行き「お代わりお願いします」も言わなく、せめて2回くらいは顔を合わせないと親しくならないほど、とにかく初対面の人とは苦手だ。しかし、今回の旅で韓国語を話せるのは私だけなので、容赦なく自分がいろいろとやらなければならないことであった。釜山→光州→ソウルという5泊6日の旅。「こんな私で大丈夫かな。」不安と心配を抱えたまま、私のサバイバルな出会いの旅は始まった。

観光で韓国を訪れる人々から、町の中でたくさんの「オパ」「オンニ」がいて驚いたとよく聞かれる。まあ、韓国でも『「オパ」が「アパ」になる。』という言葉があるほどだけど。私も今回の旅でたくさんの「オパ」「オンニ」「アジョシ」に出会った。まず、韓国での旅で出会った最初の「オンニ」といえば、釜山から光州まで一緒だったガイドさん。そのガイドさんは私たちが「WASEDA」の学生だから「頭がいい人」(?)という

先入観でみんなに会う前からとてもプレッシャーを感じていたようだ。そのオンニには妹のように声をかけ、どこへ行っても傍にいてたくさん話をした。そして連絡先を交わし、また会おうという挨拶で名残惜しい別れをした。他の「オンニ」はお店のおばさんだ。その「オンニ」は「アジュンマ」と呼ばれると機嫌がとても悪くなるので、必ず「オンニ」と呼んだ。すると、他のお客さんより量を多めにしてくれたり、何かをサビースしてくれたりした。辛いものを食べられない人がいるので、オンニに「辛くないように作ってください」と、気楽にお願いすることもできる。「オンニ、マシッソヨ！」という言葉も忘れずに。

韓国のタクシーはガイドブックにも載ってあるほど不親切。正直に今回もみんなには通訳できないほど怖いことを言う運転手さんもいた。タバコをくわえて、携帯で話をしながら、片手で危なく運転をするタクシー運転手さん。私も怖いよ…。しかし、こんな時は飛びつきり笑顔で助手席に座って、「アジョシ」と呼びながら娘のように話を聞いてあげたり、私のことも話したりする。正直に、最初の狙い(?)は、おじさんのご機嫌をとるためであったが、だんだん話が弾んでいく中で、お互いに交わす言葉も変わっていった。「日本で体壊さなく、ご飯ちゃんと食べながら、勉強頑張ってるね」と笑顔で励ましの言葉を言ってくれたアジョシもいた。「アジョシ、くれぐれも運転は気をつけてくださいね。」

韓国語を知らない観光客によくマナーがない店も多い。今回、ある店では、私たちが注文した量が少ないと、もっと頼みなさい!と強引な店員さんもいた。正直に心の中では「なんて不親切な…」と思いつつ、「オパ、食べてから他のものを頼むから^^」と笑顔で断ることもしばしばあった。

朝7時くらいだったかなあ、ダンボールを手に入れるために入った明洞のあるコンビニの「オパ」は、空のダンボールがないからと、カップラーメンが入っていた箱をわざわざ空けてくれた。本当に感謝…。

私は年に1回しか行かない韓国で、いつも会う人たちだけと話をすることが多く、それで満足していた。しかし、今回のワークショップでは知らない人とたくさん言葉を交わした。ただ言葉を交わしただけでなく、その中で、感謝の気持ちや相手の暖かい気持ちも同時に感じるが多かった。改めて言葉のパワーを感じた。

いままで初対面とは「苦手」だからと話そうともせずになんか言い訳を作っていた自分を、今回の旅で見つめ直した。これからは、「誰とだけ」より「誰とも」そして、私もどこかで、誰かに「オンニ」と呼ばれたら短い時間での言葉でももっと暖かく、気持ちが伝わる心からの言葉を交わせる人になりたいと思った。

私が韓国で出会った「オパ」「オンニ」「アジョシ」たちにもう二度と会えることができないかもしれないけど、みんなの健康と幸せを祈っている自分がある。なぜか、「オパ」「オンニ」「アジョシ」たちのおかげで、一回り大きくなった気がする。

ミニ韓国語講座

「オパ」：お兄さん 「オンニ」：姉さん 「アジョシ」：おじさん

「アジュンマ」：おばさん 「アバ」：父さん 「マシッソヨ」：おいしいです。

「オパ」が「アバ」になる。：韓国の恋人同士は彼氏をよく「オパ」と呼ぶ。そして二人が結婚して子供を生むと、その子供の名前を入れて（例えば、姫なら）、姫アパと旦那と呼ぶことを言う。

「日本語教師は生き方だ！」をめぐって——橋本弘美

細川先生の『日本語教師は生き方だ！』というメッセージをHPで発見し、刺激を受けたのが、もう4年前になる。当時ノルウェーで日本語を教えていた私は、自分の教室活動に悩んでいた。インターネットで色々探し

ていたときに、オレンジ色のHPに描かれた細川先生の似顔絵と、このことばを見つけたのだった。

「へー、日本語教育を“生き方”って言ってしまえる人がいるんだ。すごいなあ！」と雪深く寒い北欧の地でひとり熱くなった。それからはこのオレンジ色のHPをチェックすることが私の日課となった。それほどまでこのことばは私にとってセンセーショナルだった。でも同時に、「“生き方”をかけられるほど、日本語教育ってそんなに魅力あるかなあ？」と自分のクラスを省みていた。それをこうもハッキリと言い切れるなんて、この先生は一体何者だろう？…さまざまな思いを抱え、その謎を探るべく大学院に入ったのが3年前である。

院生時代、そして日本語教師として再スタートを切り、試行錯誤しながら授業を行なう中で、それまで日本語の授業では感じなかった何かが開ける瞬間があった。「日本語教育って・・・なんて深いだろう・・・」私にとっての「ことば」は、それまでの文型導入・活用・テスト云々を超え、もっと生きた人間関係を取り結ぶためのことばへと息づいて行った。ことばが生きる、クラスが生きる、人の顔が見え出す。日本語教師という仕事は、そんな可能性に満ち溢れているのだと感じた。そして生き方を投影できる奥の深いこの仕事にたずさわっていることを思うとき、北欧で感じた「日本語教育ってそんなに魅力あるかなあ？」という懐疑的な思いに、私は「YES！」と答えることができるだろう。

しかし、「日本語教師は生き方だ」というこのことばを、現在の私は、もう少し違う方向から考えている。それは、「生き方」の意味だ。例えば、『「生き方」そのものが「教室を創る」』のだとしたら、その「生き方」とは何か。これはもう自分の信念、理念、自らの人生への姿勢や取り組みに大きく関わってくることである。自分はどんな風に生きていきたいのか。一人の人間として、どのような生き方を選んでいくのか。この問いもまた深い。そんなことを最近、自分自身に投げかけ、自分との対話を繰り返し

ている。この問いは、教室活動を考えていくうえでももちろん、私が本当の意味で自分らしく自己表現しながら生きていくうえでも、もっともっとじっくり心の中で暖めていかなくてはならないことである。今は、自分自身と向き合う大切な時期だと思っている。

2005年10月、また寒さが忍び寄ってくる。北欧でもどこでもそうだが、寒い季節に色々考えるのが私は好きだ。思いが雪のように舞い降りて少しづつ積もり、やがてどっしりと重たくなる。その過程も大切だ。そして、春になれば雪が解けるように、今の問いや思いも、やがて答えが出て、新しい形へと変化していくことを、身体が覚えているからだろう。

(hirominghh@ybb.ne.jp)

世に棲む日日——埴 誠一郎

とにかく終わった。6月20日の修論提出。7月26日の口頭試問。9月13日の早稲田大学日本語教育学会の発表。その間に、秋からの契約講師のインターンシップが続いて、早稲田大学での「実践研究フォーラム」があった。9月20日の修了式と謝恩会まで、夏休みにはゆっくり秘湯でも浸かって疲れた心身を休めようという淡いのぞみは一瞬にして消えた。

早稲田の学会では、初めてインストールしてテキストを読んで、1週間で作り上げたパワーポイントで発表した。案の定、H先生から厳しいコメントが相次いだ。聞いていたひとの感想では、「普段、演習で先生の言うことを聞き流しているから、最後にまとめてガンガンやられたんだ」という人もあれば、「大学教授と年金生活者の院生が見た目対等に議論できるところに「ほそけん」のよさがあると感じた」と言った第三者もいた。たぶん両方あたっている部分があるだろう。

いわゆる「聞く耳を持つ」という言葉がある。5年ほど前になるが、参加した日本語教師の実践セミナーで、自分にニックネームをつけてなにやら遊ぶゲームをやったことがある。その時、「聞く耳」というニックネームをつけた女性がいたので、なぜ「聞く耳」ですかと尋ねたところ、「日本語教師として、一番大切なことは「聞く耳」を持つことだと思っているからです。学習者の言いたいことを最後までじっくり聞くことが一番大切。それから日本語学校の上司や仲間やからの批判を怒らず、ガッカリせず、無視せず虚心坦懐に聞くこと…、なかなか難しいですけどね。」という答えを聞いて妙に感心したことを思い出した。

8月の実践フォーラムで同じグループにいた年配の女性（某大学教授）が、H先生の話が始まったとたん、「ああ、私、頭固いからこの人の言うことわからない。聞かない」といって、身を硬くしてノートを閉じ目も閉じてしまった。私は思わず彼女の顔を見た。いくらその言説に賛成できないからといって全く耳も心も閉じてしまうのは、「いきざま」と共に、私の一番嫌いな日本語で言えば「いかがなものだろうか」。大学の先生は唯我独尊の人が多いが（またそうでなくてはつとまらないだろうが）これじゃあんまりひどすぎる…。

大学院2年間で取得したもの。修士の学位記と ACTFL-OPI（日本語口頭運用能力判定テスト）の公認テスター資格。この受験で、私から提出されたテープを聴いたトレーナーの牧野成一先生からも随分お叱りを受けた。「塙さんは、共感を持って熱心に聴いている点は評価できるんですが、人の話を最後まで聞いていませんね。すぐさえぎるし、先回りしてあなたの言いたいことはこれですかと、“Put a word in his or her mouth.”は絶対いけませんよ。」と。

9月末からはいよいよ契約講師のスタートを切ることになった。まず、「聞く耳」をもって学習者に相對することを金科玉条として臨むこととし

たい。院を終わって再び「世に棲む日日」（院生⇒「隠棲」に非ず）となったが、「三日見ざれば、刮目して待つ」ことになるかどうか。

言葉の成長——宮口さや子

大学院に入り半年が過ぎた。この半年間は正直言って辛いものだった。環境に慣れず、研究活動に戸惑い、自分を見失いかけていた。4月、満開の桜が散り始めていたのは記憶にあるが、気がついたら8月、セミがミンミン鳴いていた。あつという間の半年を過ぎた頃、今の私には心も体も休養が必要だと思い、夏はゆっくり休むことにした。地元に戻り、美味しいものを食べ、愛犬の散歩に行き、甥っ子と遊んだ。自然と心と体が少しずつ回復していくのを感じた。

特に甥っ子と過ごした時間は私を元気にしてくれた。甥っ子は2歳。前会ったときには、「あ～あ～」「う～う～」などと言葉にならない言葉＝喃語（なんご）を話していたのが、今や「ブーブ」（自動車）「クック」（靴）「オーエン」（公園）などの1語又は2語を話すようになっていた。しかも「あぼぼ」（遊ぼう！）や「こっち」（こっちに来て！）などの誘いや指示までするようになっていた。今は、明らかに言葉を使って、自分の意思を伝え、要求を満たそうとしている。指差しや動作で補いつつも、獲得した数少ない語を駆使して、何かを伝えようとしてくる。その思いに答えようと耳を傾けるが、時には意味不明の宇宙語の時もある。そんな時、私には意味不明だが、甥の母親だけには伝わっているらしい。母親は「うんうん、そうだね～」などと返事をしている。赤ちゃんとお母さんだけの秘密の言葉のようで、なぜかちょっと羨ましい。しかし、一旦母親以外の人へ自分の気持ちを伝えようとするとうまくはいかないので、甥っ子は必死で表現せざるを得なくなる。一方受け手も必死である。かわいい甥っ子に嫌わ

れまいと必死で「何を言いたいのか」「何をしたいのか」を理解しようとする。表現と理解の過程には工夫と創造と、そして忍耐が必要なのである。実は、甥っ子は一般的標準と比べると言葉の数が少ないと言われている。しかし、母親は一向に気にしていない様子で「この子はのんびり屋。言葉だけじゃなくて、いろんなことがのんびりしている」と甥っ子のペースに任せている。そうだ。甥っ子には、甥っ子のペースで言葉を貯めている時期があり、それを試している時期があり、甥っ子なりの成長を遂げているのだ。あせることはない。待つのだ。次会える時にはまたグングン成長していることだろう。この秋にはお兄ちゃんにもなる。ますます自分の気持ちを周囲に伝え、周囲の気持ちも理解する必要があるだろう。甥っ子の言葉と心の体の成長が今から楽しみである。

甥っ子と過ごした夏で、ふと気づいたことがある。私の言葉は成長しているのだろうか。大学院へ入って、ちゃんと周囲に「何を言いたいのか」「何をしたいのか」が伝わっているのだろうか。そもそも私自身の中で、私の言葉ができてきているのだろうか。私も甥っ子以上に子供の頃からのんびり屋であった。特にこの半年はスローペースであせりと不安ばかりが募っていた。しかし、私のペースでいい。私のペースでしかできない。今はそう思うようにしている。見上げると、もう秋の空。寒い冬ももうすぐやってくるだろう。これから残りの1年半、甥っ子と共に私も私なりに成長したいものである。

おしゃべりの樹とじんもんクラブ——村上まさみ

Vさんのプライベートレッスンを担当し2年半ほどになります。社会人のVさんは仕事上の必要から会社で週に3回、午前2時間の日本語クラスを受けています。仕事を立て込んで大変な時もあると思われませんが、日本

語クラスがキャンセルされることは特別な事情がない限りほとんどありません。

Vさんは、話すことを楽しむ人で、「新しいニュースはなんですか？話してください！」と、新しいニュースを種におしゃべりの樹をむくむくと育てます。初めて会った当初こそ「日本語、ぜんぜん話さない」と困った顔をしましたが、堰を切るように語りだしたVさんを前に、私は次第にこれでいいのかという焦りを感じるようになっていました。私はVさんとの活動を通し、ゆっくりでも確実に考えて話した手ごたえとその証を残していきたいと考えていたからです。そのために、新しい枝に次々に手をかけていくだけではなく、樹の姿を観て、なぜ、何のためにという問いを手がかりに、互いに話していることを把握し振り返りながらお互いの考えをめぐらせていきかけたのです。

— Vさん、とろできのう昨日言ってたことだけど…

— 昨日？何ですか？覚えてない。

— アメリカの…

— ああ、そう！私は何も考えない。話します！話します！それだけ。頭はお休み。笑

ある日、こう言って面白そうに笑ったVさんに、むむむ！やられた！と思いました。私も知能犯(!)のVさんに抵抗する「戦略」を立てなければなりません。そして、生まれたのが「語り書き活動」です。天に向かい無限に枝葉を広げる豆の樹で「頭を休める」のではなく、ちゃんと二人でそれを「観る」共有の方法を持つ。そのために語って書いて語り合うことを始めたのですが、語り合うプロセスでは互いの心を揺さぶる「なぜ」が次第に増えていきました。そして、ある日Vさんは笑ってこれを「じんもんクラブ」と命名します。この発言にはドキッとしました。しかし、

その表現が必ずしも拒絶感ではないことがVさんの活動への関わり方とその作品から見えていきました。今では「おしゃべりの樹」も「じんもんクラブ」も、二人の間に笑いを呼ぶ合言葉です。大切なことは「じんもん」と「対話」の本質的な異なりが活動を通して互いに共有された実感があることでしょう。

Vさんは4月に書き上げた作品に研究室のみなさんからコメントを頂き、大変喜ばれました。その後3ヶ月かけて全てを熟読し、今、新たな「考え」の展開を開始しています。いずれまた、何らかの形でVさんからみなさんへのメッセージが伝えられると思います。

Vさんの笑顔に支えられ、おかげさまで私も日々の実践研究に元気にとりこんでいます。

合宿に参加して得たもの——山本冨里

8月の研究科夏合宿に参加した。先学期の実践で悔やまれることがあったので、秋のクラスが始まる前に問題点を整理しておきたかったからだ。整理を次の活動へ繋げていくためには、合宿は最適の場だと思えた。

教室活動の実践にあたっては、目的と、その目的にそぐう方法が必要である。私は「自分の理解を検証し変容させる力を養う」ことを目的に、「問いを立て答を見つけるレポート」を書く活動を行った。始める前はそれなりに自信もあった。しかし振り返りの結果、活動には上記目的のための方法として妥当性があったものの、目的とは無関係の点で問題があったということが判明した。学習者はかなりの不満を感じていたようだ。

単に不満というなら、どのような活動をしたとしても、出てくるものかもしれない。誰にとっても何もかもが素晴らしいというわけにはいかない。だから不満がそのまま授業の不備を示すわけではないのだが、今回は、

それではすまされないものを感じた。分析してみたところ、不満は「皆が序列化されてしまう活動だった」という点に発している。序列化の基準は、レポートの質を上げる関わりがどれだけ上手いか／下手かである。テーマが内省的なものではなく、社会学的なものである場合にこの傾向が顕著だった。学習者の中には、「先生や他の人の思い通りに書かされた」と言った者もあった—授業への思い入れが大きかったので、このコメントは、私にとってはなかなかのショックだった。

- ・今のところ、目的自体に大きな変更の必要があるとは感じられない
- ・活動は、目的にそぐうものになっている
- ・にもかかわらず、「先生や他の人の思い通りに書かされた」に代表される問題がある

ここまですが、合宿で発表（相談）した内容だ。合宿では、とにかく緊張した。ほぼ1年ぶりのゼミ参加で、皆にどう評価されるのか、気になってしかたなかった。でも次の指針が、話しているうちに、そして話したことや頂いたコメントを振り返っているうちに、見えてきたように感じられる。

話す機会・話すために整理する機会・書く機会・そしてインターアクション……それが合宿で得られることだ。書くことでわかった（と思える）こともある。もらったコメントを手掛かりに、わかった（と思える）こともある。

今は、私は、どのような目的のもとに実践されるとしても、ことばの教室を他者と共有する活動である限り、活動の形＝設計には通底すべき要素があると考えようになっている。ことば・他者・共有を軸にこの通底要素を探り、次の活動では、2つとない教室を2つとない固有性を持つメンバーで共有する意味を、もっと大切にしたいと思う。

「目的にそぐう方法を考える」ことは、そればかりでは、「目的のためなら手段を選ばず」ともなってしまうかねない。

(nezima@hotmail.com)

人って当てにならない・・・？——山本 玲

先月、大学時代の友人と一年ぶりに会う機会があった。彼女は、大学三年の秋から留学しており、今年の五月に帰国した。そして現在は、就職活動中である。てっきり大学院に進学するものだと思っていた私は、彼女が就職の道を選んだということに驚いた。

進学か就職か、彼女は相当悩んだという。そして、今も悩んでいるという。「本当にやりたいことをやらないと後悔する」、「大学院ならいつでも行けるけど、新卒で就職できるのは今しかない」、「就職なんて、あなたならすぐに決まるから大丈夫」。周りの人たちは色々なことを言うらしい。

そして、彼女はこう言った。

「人って当てにならないんだよね。」

どれだけ人に相談しても、その人は何もしてくれない。自分のことは自分で決めなければ、前に進まない。こんな当たり前のことが、一般論ではなく分かったという。

感服した。気持ちいいぐらいだった。

大学院に入学して早半年。目の前のことをこなすので精一杯だった。あまりの忙しさに、気づいたら目的を見失っていた。私は何をしにここへやってきたのか。私は何がしたいのか。分からなくなっていた。不安でたまらなかった。

それでも、日々は過ぎていく。レポートという形で、私の考えていることを示さなければいけない時がやってきた。立ち止まっている余裕など無い。必死で私は文章を書いた。すると、私の書いたものに対して、色々な人たちがたくさんのアドバイスやコメントをくれた。それを元に、また書き直した。すると、またコメントが返ってきた。

「結局、あなたは何がやりたいの？」

言葉が出なかった。もらったコメントに応えることはしたけれど、そこで「私はどうしたいのか」と問うことを忘れていた。甘かった。誰かの問いかけに、ただ漫然と応えるだけでは前に進まない。そういう意味では、「人は当てにならない」と思う。

だが、人はきっかけになる。「私はどうしたいのか」なんて、独りで考えていても出てこない。誰かとの関わりあいの中でしか、意識されないし、創られてもいけないものだと思う。大切なのは、人からの問いかけに対して、自分はどうしたいのかと自分に問うことだ。日々の忙しさにかまけて、場当たりの、物事を処理することに時間と労力を費やすだけでは、前に進めない。自分のことは自分で決めなければ、前に進まないのだ。

人は当てにならないけれど、きっかけにはなる。こんなことが、一般論ではなく分かった。

友人のことばに、私は大きくなずく。そして、こう続けた。

「でも、きっかけにはなるよね。」

それから、一ヶ月。いま、2期目が始まろうとしている。

他人の眼を気にしていなくなる「私」——矢本美和

最近太った。太りすぎである。運動不足、ストレスなど、原因は自分でも思いつく。

運動不足といえば、ダンスを休んでからしばらくたつが、またダンスをはじめようかと思う。今度は、踊りたいと思ったきっかけを忘れないようにしたい。

きっかけは、あるパーティーで、たくさんの人たちが楽しそうに、幸せそうに踊っている姿を見て、「私もあんなふうに踊れたらな」とステッ

プすら全く知らない自分をはがゆく思ったことだった。そのあと、すぐにダンススクールをさがして入会した。

だが、わくわくしながら出席した初日のレッスンで、ずらっと生徒全員で鏡の前に並んだ中、太目の自分の姿はまさに場違いの感があった。講師も、太っている人(私)に向ける目は冷ややかだった。

やせなければここで受け入れてもらえない気がした。それからというもの自宅でもステップ練習をし、お酒も甘いものもかなり控えて体重計とにらめっこの毎日。「他の人に見られてもはずかしくない体型」になることが目的になっていったのである。

最初の、「楽しく踊りたい」という気持ちを失い、講師や他の生徒の眼を気にして、体型を気にしたり、講師のいちいち細かい注意にも忠実に従おうとした。思えば、気に入られる生徒でいたかっただけなのだ。

だが、講師とは次第に意見が衝突するようになっていた。講師の目指すダンスがよくわからず、私は懸命に自分が思っていることを述べようと、講師の考えも聞きたいと思ったが、「あなたは初心者。私の言うとおりにやって。私の教え方が気に入らなければ、他の先生にすればいい」と、言われただけだった。

そこまで言われてもその講師のもとを去れず、ぐずぐずと身のはいらないレッスンをたまに受けていた。ある程度はなじんだ場所だったし、ここで受け入れられなくなったら私はどこかで受け入れられるのだろうか、という不安があったからだ。形だけでもそのスクールの生徒であることで安心しようとしたのだ。

「受け入れられなければならない」と強迫観念的に「他」に依存することをやめない限り、自分の不安はなくなりはない。このさきダンスを楽しむこともできないだろう。そう考えられるようになってやっとそのスクールに距離をおくことができるようになった。

自分の指導を絶対的なものとして従わせるというスタンスの講師にも問題はあろう。

しかし、講師がどうであれ、いずれにせよ他の人のことばや態度を受け止め進んでいくのは私だ。どう受け止めるかどう進むかは、いつだって私自身の選択なのだ。

私が切に踊りたいと願ったあの日、中には太っている人もいたし、やせている人もいた。大切なのは、人に見られて誇れる体型であることではない。自分自身が踊りに集中でき、楽しいと思うことだ。そのはつらつとした人々が集っている光景に私は惹かれたのだ。

ことばの教室でも共通するものを感じる。つたない発音や文法をまわりの人に聞かれてははずかしいからきれいに話したいということに神経を払うのではなく、自分が向き合っている相手と一所懸命に話すことを楽しむことが重要なのだ。互いがそのように向き合うその時間の共有は、なにものにも変えがたいものなのである。

(miwayamoto@hotmail.com)

韓国の日本語教室「PAGODA」での経験を通して——^{ユン クッキー}尹 菊姫

「PAGODA」は韓国のソウルにある日本語教室の一つで、いろんな目的をもった学生たちが日本語を習うために集まる所である。私がここで「日本語会話」という科目を担当して勤めるのも9ヶ月目になる。私の役割は次のコースである「日本人会話」へ進む前に「基本的な日本語」でコミュニケーションが出来るようにすることであった。

「PAGODA」での日本語教育の過程は以下のものである*。

〈文法マスター〉

基礎1: 1ヶ月 (ひらがな簡単な挨拶名詞)

基礎2: 1ヶ月 (ます形否定形過去形など)

基礎3: 1ヶ月 (使役・受動尊敬語など)

読解: 1ヶ月 (文法をまとめつつ, 多様な語彙を導入)

日本語会話: 2ヶ月

日本人会話レベル1: 3ヶ月

日本人会話レベル2: 3ヶ月

日本人会話レベル3: 3ヶ月

高級レベル: 3ヶ月

(* 以上の内容は先生方によってその目的や教える範囲が違う。)

以上の中で私が担当した「日本語会話」のクラスの学生が日本語を習う目的は“会社で使うために”, “専攻が日本語なので”, “趣味で (ドラマや歌の歌詞に興味があって)” “日本へ留学するために” など様々であった。共通した目的は「日本語で話したい」ということであった。

日本語会話をすることにおいて重要なのは, やはり自分の意見や考えていることが話せることだと思う。私が「日本語会話」のクラスで学んでほしかったことも「簡単な日本語で自分の意見や考えていることが話せる」ことであった。「PAGODA」という利益を目的にした会社で自分がしたいことを皆するにはいろんな制限があったが, 出来ることは教科書以外に作った補充資料を通して話し合える話題を与えることであった。50分の授業を20分は教科書に出る文法の説明, 残り30分は会話の時間と決めて授業を進めた。毎日, 与えられる話題は違うものである。例えば「私の家族・友達・私の一日・私が好きな物・私の過去・未来・私の夢・私の理想のタイプ」等と自分の話が出来そうな話題を与え, それについて考えながら話すことであった。しかし, 30分という時間はお互いのことについて話し, 分かち合うには短い時間である。また, 「考えるのが一番嫌い。」「相手が

何を言っているのか全然分からない」, 「知っている語彙が少ない」, 「自分が話すだけで精一杯だ(聞くことまで集中できない)」という反応を聞きながらこの授業の問題はなんだろうかという問題に立たされた。言葉を教えることより考えていることが話せるように学生をフォローすることが自分の中で一番大変だった。でも、学生の中にはコミュニケーションする方法をその話題の中で探しながら上手に話しこなせる学生もいた。一方では、無理にさせているようで違和感を感じることもあったが、教師の立場ははっきりしていれば学生はそれについてくると思う。そう考えた時に自分のクラスでの目的意識が薄かったことを反省しつつ、これからも日本語教育において自分が納得できる授業になれるまで頑張りたい。

旅立ってから一年——陸麗青

金木犀の香りが漂っている秋がまた訪れてきた。言語文化教育研究室に入ってから早一年間が過ぎてしまった。

この一年間は自分に問い続け、「わたしの立場ってなに?」を探し続けてきた一年だった。纏れた糸を解すように混沌とした自分の問題意識はゼミでの発表をするたびに、少しずつ明確化してきた。

「わたしは本当に何をやりたいのか」, 「この研究は何を明らかにしたいのか」ということを追求してきた過程は長い旅をしているようだ。旅の終着点はまだ見えないが、旅立つ時の心細さ、無力感、嵐の洗礼を経て、拙いながらだんだんベクトルをコントロールしはじめてきた一種の力になってきた。この先、「どこに行くべきか?」と決めるのは自分しかできないと悟った。

私の旅は、コミュニケーション能力の伸び悩む「高原現象」からはじめた。

「「高原現象」ってなに？」…

「コミュニケーション能力は持続的に伸びられるのか？」……といった質問を浴び、「私の考えているコミュニケーション能力とは一体何なんだ？」という立場の明確化は問われてきた。

自分の立場を考えて、表現して、他者とのインターアクションを受けてから、また考え直して、また表現するというプロセスを繰り返しているうちに、行き着いたのは自分が求めてきたコミュニケーション能力は文法・文型・語彙の能力ではなく、それは人と人のコミュニケーションの中で、自分の考えていることを把握し、それを他者に向けて伝え、他者に自分のことを理解してもらい、他者との人間関係を構築する力ではないかと気づいた。

「足りない、足りない,」「もっともっと伸びたい」と言うふうに分が求めているコミュニケーション能力の本質をとことんと探究し、日本語学習者が遭遇している頭打ち状況とは一体何なんだ、その打開策はどこにあるのかといった問題を考え続けて、分析し、研究の立場を明確にしていく旅は今も続いている。この旅の中には波風が絶えないと思うが、いつまでも冒険する心で勇ましく向き合っていきたい。